

第五部 『イライザに寄せる日記』論



第十二章 懸想と死神——晩年の恋愛遊戯

一

ローレンス・スターンには、その絶えざる妄想と惑溺と不安の最晩年（一七六七—六八）になした二つの書き物がある。『イライザに寄せる日記』（一七六七年四月十三日～八月四日）と『センチメンタル・ジャーニー』（一七六八年二月出版）である。そして前者の狂乱・妄想・感情惑溺ふりと、後者の静的な感情交感・ロココ的な優雅な趣味・芸術的な抑制とは、当時のスターンの精神の振幅の両極を示していると言つてよい。一方では狂恋の炎に身を焼くように見せながら、また、発熱による妄想に病氣のわが身を遊ばせているように見せながら、他方では冷静な醒めた意識で彼自身の書く行為に向かつている。そのようにしてはじめてスターンの生身は崩壊からまぬかれていたように思われる。もつとも彼自身の実際の死は、『イライザに寄せる日記』の一七六七年八月四日以後の中絶から七ヶ月後、『センチメンタル・ジャーニー』刊行から一ヶ月後の間近のことであつて、以下問題にする『イライザに

寄せる日記』は特に、恋の妄想と発熱による狂気に追われながら、同時に、近づく死神の到来の予感を避け得ないままに書かれているように思われるのである。『イライザに寄せる日記』の執筆は一七六七年四月から八月まで、『センチメンタル・ジャーニー』は同年六月から十月まで続いている。従って六月から八月の夏の約三ヶ月間は両者を並行して書いていくことになる。このようにほぼ同時期に書かれたものが、一方では芸術的洗練を示し(『センチメンタル・ジャーニー』の場合)、他方では抑制のゆるんだ感情の氾濫ぶりを映している(『イライザに寄せる日記』の場合)ことは、作家スターンにとってはあまり名譽なことではないかも知れない。しかしスターン晩年の文学の在り様を知る上で、『イライザに寄せる日記』が暗示している様々な問題は、『センチメンタル・ジャーニー』とは別の重要性を持つていようである。この小論の目的は、以下に『イライザに寄せる日記』の分析を試みながらスターン最晩年のエロスとタナトスの関わりを、書く行為とからみ合わせて考察してゆくことである。なおここにおける筆者の立場は、『イライザに寄せる日記』を「a literary writing」と見る立場に立つものである。「日記」という形式は必ずしも真実のみをそこに読み取り得る形式ではないが、それ故にスターンの如く *myselfification* を本領としたように見える作家にとって好ましい形式であったかも知れないからである。又この『イライザに寄せる日記』を始めて編纂し刊行した W・L・クロス<sup>(1)</sup>の記す所によると、『イライザに寄せる日記』の原稿は出版を意図されたかのように、多数のインクによるなすり消しや行間の書き入れがあり、さらにスターン自身の次のような前書きが付されてあつて、スターンにとって『イライザに寄せる日記』は読者を意識する必要のないような単なる気慰みの書き物ではなかつたことが分かる。この前書きは『イライザに寄せる日記』全体をフィクション化しようとするスターンの

意図を以てしるべし。

This Journal wrote under the fictitious Names of Yorick and Draper——and sometimes of the Bramin and Bramine——but tis a Diary of the miserable feelings of a person separated from a Lady for whose Society he languish'd——

The real Names——are foreigne——and the Account a Copy from a french Manuscript in Mr's hands——but wrote as it is, to cast a Viel over them——There is a Counterpart——which is the Lady's Account [of] what transactions daily happend——and what Sentiments occupied her mind, during this Separation from her Admirer——these are worth reading——the translator cannot say so much in favour of Yoricks——which seem to have little Merit beyond their honesty and truth——<sup>(2)</sup>

あるいは文学史的に見て、当時のいわゆる「書簡体小説」の流行のうちにこれを入れることも可能であろうし、スウィフトの『ステラに寄せる日記』*Journal To Stella*のことがスターンの念頭にあったことは、既に一七六七年三月ドレイパー夫人宛の手紙の終わりの方にかがうことが出来るのであつて、<sup>(3)</sup>これが『イライザに寄せる日記』のモデルとなつたと言つてもよい。

始めに『イライザに寄せる日記』出版に至るまでのあらましを述べておきたい。スターンがその最晩年の情熱を傾けて懸想した相手である、『イライザに寄せる日記』のヒロイン、イライザ即ちダニエル・ドレイパー夫人に初めて出会ったのは、彼が『ヨリック氏説教集』を出した翌年一七六七年一月、ロンドン滞在中の事である。彼はこの時東インド商会理事会議長で海軍提督のウィリアム・ジェイムズ（一七二一？—一八三）の知遇を得て、ソーホー区にあるその大邸宅に毎週通い、インド関係の客達とも親しく交わるようになった。その客の中にドレイパー夫人がいたのである。夫人は、グロスター州の名門の家系の血をひくインド植民地長官の娘としてインドに生れ、幼年にして教育のためイギリスにやられ（それが当時の習慣であつたが、本国においてもあまり上等な教育を受けなかつたようである）、再びインドに帰り、一七五八年十四才で東インド会社の有能な社員ダニエル・ドレイパー Daniel Draper と結婚した。夫は二十才も年上という、いわゆる幼な妻であつた。一七六一年までに息子と娘が生れ、一七六五年に子供たちの教育と、妻の出産・育児による熱暑の中での疲労をいたわるため一家は帰国した。夫のドレイパーはすぐに単身インドへ戻つたが、夫人はインド関係の人々のサロンとなつていたジェイムズ家のサークルに入り、やがて一七六七年の一月、スターンとの出会いを果たすのである。

その時スターンは五十四才、『トリストラム・シャンディ』の作家として名声の頂点にあつた。（この年も彼は九巻目の『トリストラム・シャンディ』を出す、これが最終巻となつた。）一方、ドレイパー夫人エリザベスは、二

児の母親であるが未だ二十三才、スターンの娘リディアにわずか三つ年上という若さであった。スターンの妻エリザベスと娘リディアは三年前南仏モンペリエに残したままであり、多感の人スターンとしては、ドレイパー夫人の中に娘リディアの面影を見、それを愛しく思ったことであろう。夫人は極立った美人ではなかったが、小説なども読み、教養もある程度は積んでおり、多くの崇拜者を集める魅力——ジェイムズ家のサークルのあいだで彼女は 'belle Indian' と呼ばれた——を備えていた。このようなタイプは、他ならぬかつてのスターン夫人が持っていたものであつて、スターンが、容色はたとえ美しくなくとも、上品・活発で教養があるような女性像に惹かれる性向を持っていたということは言えるかも知れない。<sup>(4)</sup> スターンはかくしてイライザの崇拜者となり、著書の『説教集』や『トリストラム・シャンディ』を贈つて夫人の歡心を買つた。<sup>(5)</sup> イライザにしても名声ある作家から崇拜され、虚栄心も操られれば悪い気はせず、インドに事寄せてスターンを知恵者「ブラーミン」'Bramin' と呼び、スターンの方は彼女を「ブラミーヌ」'Bramine' と呼び交して、次第に彼らの情熱の度を増していったのである。一年後に死を迎えることになるとは知る由もないスターンは、娘のようなイライザにその老いらくの情熱を傾け、二月三月と移る間にも毎朝手紙をやりとりして欠かすことがなかった。この二人の恋愛は最初から周囲の人々も認めるものであり、スターンは招かれた食卓などでイライザのことを話題にするのを好んでいたらしいことは、三月の或る日の、アレクサンダー・バザースト卿 Lord Allen Bathurst (一六八四—一七七五) ——ポープ、アディソン、スウィフト、ステュールらとも親交のあつた政治家——との会話の様子を伝える手紙を見ても分かる。<sup>(6)</sup> このような〈openness〉は或る意味でスターン文学の一特質であつて、そこには倫理道德を破壊しかねない道化的精神の可能性が含まれてもいると

思われるのだが、要するにイライザとの恋愛事件をプラトニックなものにしておく余裕がスターンにはあったのである。彼の愛情には父親的なものが含まれていたこともこの事と無関係ではないであろう。彼は娘リディアにさえイライザとの交際を打明けている。従つてこの恋愛も、彼がそれまで数多く行なつてきた恋愛遊戯の一つに過ぎなかつたと言えはべるであろう。イライザへの接近の仕方、かつてエリザベス・ラムレイ（スターン夫人）に対して行なつたのと同じパターンのくり返しに過ぎない。しかしそれまでの恋愛遊戯と異なる点は、それがスターンの死を間近にひかえた最後の事件であつたという伝記的な事実の他に、イライザの事件と書く行為とが殆ど同時に進行しているということである。イライザはこの時期のスターンにとって「書くこと」の源泉となつていたように思われる。つまりイライザとは、端的にスターン最晩年のエロスの対象というよりは、現実の人間以上に高められた何かであつて、それ故スターンと彼女との関係にプラトニックな性格をおびさせることになつた何かである。それをスターンの想像力の起点と言つてもいいであろうし、彼自身の現実の状況を強く実感させる何か、あるいは彼に病的な妄想を許して現実からの逃避を可能にさせてくれる何かであると言つてもいいであろう。以上のようなことがスターンの中で明確にされるのは『イライザに寄せる日記』を書くことを通じてであるが、その契機となつたのが二月の或る日インドの夫からイライザへ送られてきた手紙であつた。それは彼女にすぐインドへ戻るように要請していた。その日イライザはスターンとの関係の失われることを悲しむあまり、床につき誰とも会わなかつた。スターンにも衝撃だったが、とにかく励ましの手紙を送り、やがて面会を許され、以後六週間つきつきりでイライザを看病した。さらにスターンは財政的な援助さえ顧慮しながら、イライザにイギリスにもつと滞在して休養して



くれるようにと懇願したが、彼女は結局夫の要求に逆らうことは出来なかつた。<sup>(9)</sup>それが生身のドレイパー夫人の情熱の限界であつたといえる。再会を約束してついにイライザはインドに帰ることになつた。イライザがアール・オブ・チャタム号でデイルを出航したのは一七六七年四月三日のことである。その時スターンは病氣のために見送りに行けなかつたが、イライザが未だ滞英中、彼らはお互いに日記をつけ、再会の折にそれを交換するように約束を交していたのである。

これが『イライザに寄せる日記』が書かれるに至つたいきさつである。このうちイライザの方の日記と、『イライザに寄せる日記』の四月十三日までの分とが消失しているので、今日われわれが目にする日記はスターンの側からだけの不完全な日記であり、イライザ自身の言葉がどのようなものであつたかを知ることが出来ない。こうした事情のために、この日記はスターン一人の一方的な惑乱ぶりを強く印象づけるように思われる。

スターンは四月十三日、日曜<sup>(10)</sup>日から八月四日までイライザへの日記を書き続けたが、南仏に残した妻と娘が秋頃帰国する予定となつたので、スターンとしてはイライザへの懸想に浸つてばかりもいらなかつた。イライザとの恋愛事件を知つた妻の感情の悪化が予想されたのであろうし、彼女の帰国の意図が南仏永住のための財産整理にあることもはつきりしていたからである。そしてまた『センチメンタル・ジャーニー』の執筆のことが彼にとつてより大事なものとなつても来ていたのである。こうして『イライザに寄せる日記』は八月四日までで中断されることになつた。妻と娘は十月二日にスターンのいるコックスウォルド（通称シャンディ・ホール）に帰つて来た。<sup>(11)</sup>

スターンと妻との中は結婚の当初こそ良かったが、やがて熱も冷め、一七五九年スターンが『トリストラム・シ

ヤンデイ』の作家となる頃から特に悪化し、その年妻には精神障害の徴候さえ表われ、別居の機会が多くなった。『イライザに寄せる日記』を読むと、彼にとつて妻は悪妻だったという推測が可能ないように思われる。例えば七月十一日の日記には、'the Ingratitude and unquiet Spirit of a restless unreasonable Wife whom neither gentleness or generosity can conquer' といった激しい妻への罵倒の言葉が見られるのである。

いったいスタンは現実というものに満足させられたことのない人であったように思われる。その幼年時代も大時代も結婚も本職の牧師の仕事も、彼にとつて現実的には成功したものではなかったようである。幼年期の十年間、彼は連隊旗手として終わった父親の部隊の移動するままに、アイルランド、ウエールズ、ワイト島などの任地を転々として病弱のうちに過ごさねばならなかった。大学時代は叔父からの送金と、縁故によつてやつと貰った奨学金で苦しい学生生活を送り、卒業した年に最初の嗜血をした。叔父とは後に教会内部の権力争いにまきこまれた時、敵対者同士となった。また聖職者としても、ヨーク大主教となった曾祖父リチャード・スターンほどには出世しなかった。そして彼の家庭は、彼が作家として名声を確立した時に崩壊をはじめたのである。スターンが『イライザに寄せる日記』を書いている頃すでに妻は五年ほど異国にあつた。そしていま彼女はスターンの浮気を耳にし、このさい財産を整理して自分と娘は暖い南仏に永住しようと決心したのである。スターンは妻の意向に同意したが、財産整理とはいえ、事実は彼が「まきあげられ」(“Reeced”)、「はたもとられ」(“Flayed”)たのである。<sup>(12)</sup>妻と娘との三人水入らずの最後の生活は、しかし表面上円満に過ごされ、彼女達はやがてヨークの方へ去り、スターンはシャンデイ・ホールで『イライザに寄せる日記』の執筆に専念した。この頃の事情を『イライザに寄せる日記』の

最後の十一月一日の日記が伝えている。

スターンは翌一七六八年三月のロンドンでの客死に至るまで『イライザに寄せる日記』の草稿を離さず持ち歩いていたらしい。死後それは多くの書類に混じって発見され、ジェイムズ家がそれを預かった。書類の中にはスターンがイライザの夫に宛てた手紙と、ジェイムズ夫人宛てのイライザの手紙も入っていた。これらが全部いつの間にかバースのギブズ某の書齋に紛れ込み、やがて反古にされた。ところで或る日ギブズ氏の十一才になる息子トーマス・ウォツシュポーン・ギブズがロウソクの点火用の紙きれをさがしていると、偶然"Yorick"と"Eliza"という名前の付してある草稿を発見した。彼は以前にこれらの名前を聞いた覚えがあったので一八五一年までこの草稿を取っておいたのである。もしこの少年がヨリックとイライザの名を知らなかったら、われわれはこの"most illuminating document"<sup>(13)</sup>を永久に失っていたことになる。トマスは一八五一年五月、当時の文壇の大家サッカレイがその著"*The English Humourists*"の中にスターン論を入れる予定であると聞いて、『イライザに寄せる日記』の草稿を彼に送ったのである。周知の如くサッカレイのスターン評は辛辣極まりない"a terrific assault"<sup>(14)</sup>であるが、主として性格論及び道徳論的にスターンを批評しているサッカレイがこの『イライザに寄せる日記』を読んで、そのロマンティックともいべき感情の奔流を気持ち良く思わなかったであろうことは想像に難くない。サッカレイは『イライザに寄せる日記』の草稿をギブズ氏に返し、やがて一八九四年彼の死に際して、草稿は大英博物館に保管された。そして前述した如く、W・L・クロスが一九〇四年に草稿をまとめて編集刊行したことにより、初めてこの老作家の晩年の激情がわれわれに明らかにされたのである。

叙述が長くなつたが、以上が『イライザに寄せる日記』刊行に至るまでの凡その経過である。こうした伝記的事象によつて日記にまつわる内的・外的状況をふまえた上で、日記自体の問題に入つてゆくことにしたい。

三

『イライザに寄せる日記』はその四月十三日付の始まりから、スターンのイライザ思慕の情によつてぬり込められている。彼らはいわば恋情の頂点にある時に引き裂かれることになつたのであるから、スターンの言葉が熱烈になるのも首肯できる。スターンはイライザに呼びかける――

—eternal Sun-shine ! Eliza !—dark to me is all this world without thee ! and most heavily will every hour pass over my head, till that is come which brings thee, dear Woman back to Albion. (Sunday April 13)

I am so ill to day, my dear, I can only tell you so—I wish I was put into a Ship for Bombay—I wish I may otherwise hold out till the hour We might otherwise have met—...—Come !—Come to me soon my Eliza and save me ! (April 29)

Remember my Truth and eternal fidelity—Remember how I Love—remember What I suffer. (May 29th and 30th)

—O Eliza ! Eliza !—Heaven nor any Being it created, ever so possessed [*sic*] a Man's heart—as thou

possesest mine—(June 21)

—adieu—adieu—and remember one eternal truth, My dear Brannine, which is not the worse, because I have told it thee a thousand times before—That I am thine—and thine only, and for ever. (August 4)

四月から八月までの四ヶ月にわたるこうした持続力も、愛情の強さの故であることには違いないが、見方を変えれば、対象の不在と、例文に見られるスターンの病氣（肺結核）がこの持続力を支える条件である。イライザがインドに去ったことによつて現実の愛は不可能になつてゐるが、逆にこうした現実の不可能性が、スターンの想像力を強め且つ持続させる作用を果たしたであろう。〈書く人〉にとつて現実が不可能態として表われる時、それに耐え得るには想像力（＝言葉）をもつてする他にないからである。イライザが現実にそこにいないことによつて、スターンの中にエロスが喚起され、そうしてスターンは日記を書くことに向かつたであろう。

もう一つの条件であるスターンの病氣については、前述した如きスターンの生来の病弱と宿痾である胸の病いが、彼の体質のみならず氣質までも決定したであろうと考えられる。そして現実の不如意に加えて、咯血と発熱という肉体の危機が彼に憂鬱な気分を与え続け、そのことが彼を瞑想と書くことへと向かわせたであろう。つまり病氣もまた現実を不可能にするものであり、言葉の行為へのプロセスは右の条件と同じであるといえる。

ところでスターンには、発熱の中である一瞬、精神の錯乱あるいはエクスタシーの状態に見舞われたことがあつたやうである。次は『イライザに寄せる日記』には入っていないイライザ宛ての手紙（三月三十日付）である。こ

の時イライザはインドへ旅立つ直前である。スターンは悲しみに耐えず、咯血し、彼女から貰ったハンカチをその血で染める。死に近い状態の中で彼は夢を見る。

I have been within the verge of the gates of death...this poor, fine-spun frame of Yorick's gave way, and I broke a vessel in my breast, and could not stop the loss of blood till four this morning. I have filled all thy India handkerchiefs with it. —It came, I think, from my heart! I fell asleep through weakness....I dreamt I was sitting under the canopy of Indolence, and that thou earnest into the room, with a shawl in thy hand, and told me, my spirit had flown to thee in the Downs, with tidings of my fate; and that you were come to administer what consolation filial affection could bestow, and to receive my parting breath and blessing. —With that you folded the shawl about my waist, and kneeling, supplicated my attention. I awoke; ...

スターンとイライザの、類型としての「父娘」関係は、ここに見られる「filial affection」という言葉にもうかがわれるが、このような言葉によってスターンのエロスは和らげられているために、その自己憐憫の、同情を誘うような調子にも拘らず、『イライザに寄せる日記』の印象は反撥を感じさせるようなものではない。むしろ、『イライザに寄せる日記』の描写の総てが真実ありのままのものではないとしても、少くともここに認められた激情・感乱の

調子だけは、スタンンの内実を示して余りあると思われる。ところでしかし、エロスの本能がそのように和らげられているのとは対照的に、タナトスの本能は、スタンンの中に恒常的な発熱と嗜血という形で表われていると言えるであろう。彼は嗜血の後の夢の中で、愛するイライザが他ならぬ自分の死を見取ってやってくれるのを見ている。スタンンとイライザの「父娘」関係を取り払えば、これは正にロマンティックな「愛死」の夢想である。そしてこの夢想は、ヒーローが、愛するヒロインの死を見取るといふ図式の正反対を示していることよって、スタンンの無力感 *disability* を暗示しているであろう。彼は病氣のためにも消耗していた。病氣というものが現実からの逃避を必至にするものであるとすれば、スタンンには正にその現実逃避は不可避であったと言える。このようなスタンンの心理的過程が、無力感につながり、メランコリーにつながってゆくことは容易に察せられる。そして当然、無力感の彼方には絶対的な死がある。

デイヴィッド・トムソンは、『イライザに寄せる日記』はロマン派的な崩壊と傷痕の先がけを示すその方法と、自己崩壊の恍惚の描写の故に革命的であるという評価を下して、おおむね妥当ではあるまいかと思われるが、さらにスタンンの〈本質的な無力感〉 *essential disability* を指摘しているのは興味深い。次はその一節である。

Above all, the *Journal* is revolutionary because of the way it anticipates Romantic collapse and trauma and because of its rapturous description of disintegration. Sterne died apparently of consumption, and was treated only months beforehand for venereal disease, but the essential disability under which he lived was

a morbid grasp of his own insubstantial identity.<sup>(2)</sup>

トムソンの説は言いかえると、自己自身の虚妄の正体を病的につかんでいた故に、スターンには本質的な無力感があつたというのである。恐らくこの説はスターンの本質を問題にする時、最も強力な意見の一つとなるのではないかと思われる。スターンの無力感とは、外面的には先述したような、現実的な失意と病氣とから来していると考えられるが、内面的には彼の自我のとらえ難さ、手ごたえの無さ、つまり現実感の欠如に対する予感から生れて来ているのではなからうか。このようなスターンにとってイライザは、自己の内に強い感情を喚起してくれる源泉なのである。イライザを思うと新しい感情が流れ出すのがスターンには感じられる。例えば四月十五日の日記。

—Staid the whole evening at home—no pleasure or Interest in either Society or Diversions—What a change, my dear Girl, hast thou made in me!—but the Truth is, thou hast only turn'd the tide of my passions a new way—they flow, Eliza to thee—and ebb from every other Object in this world.—(April 15)

つまり、そのようにして彼の無力感が克服され、崩壊が支えられている。

ある時にはしかし、スターンの虚妄の自我は、錯乱あるいは熱狂のうちに、幽霊さえ見るに至る。四月十六日、彼は「ジエイムズの散薬」という発汗作用のある薬を飲んで、鬱々とした状態でイライザの肖像画を眺めている。



そうしながら彼女とよく語ったエーリュシオン（神々に愛された人々が、死後に住む楽土）の到来を待ち望んでいる。そこへ幻の女性コーデリアの幻影が入り込む。

I look forwards towards the Elysium we have so often and rapturously talk'd of—Cordelia's Spirit will fly to tell thee in some sweet Slumber, the moment the door is opened for thee—and The Bramin of the Vally, shall follow the track wherever it leads him, to get to his Eliza, and invite her to his Cottage.—(April 16)

しばしば彼は、コックスウォルドから二マイルほど離れたシトー派の修道院の廢墟バイランド・アベイへ夜の散歩に出ている。六月十二日にはこの廢墟へ、非在のイライザを伴っている。廢寺への夜の散歩が与えた幻想の中の思ひは次のようである。

—dear Enthusiasm!—thou bringst things forwards in a moment, which Time keeps for Ages back—I have you ten times a day besides me—I talk to You Eliza, for hours together—I take your Council—I hear your reasons—I admire you for them!—to this magic of a warm Mind, I owe all that's worth living for, during this State of our Trial—(June 12)

そして、未知なる女性に宛てたとも考えられている六月十八日の手紙には、コーデルリアの幻が廃墟の寺への夜の散歩に、他の昔の尼僧たちの霊と一緒にいつてきた様子が述べられていて、スターンがいくらか狂的な幻想に心を奪われてしまっているのが感じられる。しかしいつも思っているのはイライザのことばかりで、幽霊のコーデルリアもイライザへの橋渡しの役を負わされているに過ぎない。

— poor, hapless Maid ! cried I — Cordelia gently waved her head — it was enough — I turn'd the discourse to the object of my own disquietudes — I talk'd to her of < Lady\*\*\*\*\* > my Bramine ; I told her, how kindly nature had form'd you — how gentle — how wise — how good — Cordelia, (me thought) was touched with my description, and glowe insensibly, as sympathetic Spirits do, as I went on — This Sisterly kind Being with whose Idea I have inflamed your Love, Cordelia ! has promised, that she will one night or other come in person, and in this sacred Asylum pay your Shade a sentimental Visit along with me — when ? — when ? said she, animated with desire — God knows, said I, pulling out my handkerchief & dropping tears faster than I could wipe them off — .. (June 18)<sup>(17)</sup>

仮構のロマンスは、例えば五月一日の日記に、かつての恋愛遊戯の対象の一人「シバ」(恐らくはレイディ・ウォークラスと推測されている)との再会の様子が、洗練された軽妙な調子をもってフィクション化されて、それが『イ

ライザに寄せる日記』の文体を予想させているという例があるが、コーデリア登場の場合、その背景の道具立てはバイランド・アベイという廃寺であり、夜であり、足もとのイバラBriars（六月十二日の日記）であり、コーデリアという幽霊であって、これらが『イライザに寄せる日記』の中にゴシック・ロマンスに近い雰囲気を作りあげる要素となっている。ちなみに、「イバラ」は、生命・欲情、そして死の象徴である。病苦と恋人の不在が生み出す非現実の世界に身をゆだねているスターンは、この時恐らく怪奇な幻想の中に自己にとつての現実感を得ようとしているのであり、そのことにおいて彼はロマン派の心情をも抱え込んでいたのである。このような部分に限らず、『イライザに寄せる日記』を読んでいるとわれわれは、この作者を単に理性の時代の人とか、笑いの文学者といった概念でまとめることの不合理さを感じる。『イライザに寄せる日記』には笑いが無い。ただわずかに四月二十四日の日記に、少し恢復したスターンが、イライザのために『トリストラム・シャンデイ』の中の「鼻物語」や「上下窓事件」のことを話してやり、その後二人の医者呼んで病状判定をして貰うところで、「梅毒」であることをほのめかされ、「妻とは十五年の間同衾していないのですがね」と反論する場面に、滑稽なくすぐりがあるくらいである。

恐らくはスターン自らが、自己のアイデンティティを捉え難かったのであり、それ故われわれはスターンの本音を聞きとり難いのである。彼は例えば次のように、つねに現実から逃げ出し、追ってくるものをはぐらかし、道化

—The truth is this—that my pen governs me—not me my pen. (19 Sept. 1767)<sup>(28)</sup>

これは直ちに『トリストラム・シャンディ』の同じ言葉を想起させよう。〈pen〉とはつまり〈書くこと〉であり、〈私〉を支配するものは書く行為そのものであって、〈私〉が書くことに対して、〈私〉は窮極的な責任は持てないという訳である。しかし、スターンの道化精神を考慮に入れるとしても、ここにはなお自らを制御しがたく感じている一つの精神があるといえないであろうか。身を僧職に置き、古典の教養も積み、かつ自意識のうちに醒めていく知的精神が、自己自身を測りたいと思っている。彼は、シャンディ・ホールの人々がそうであるように、現実に対しては無力である。現実に対抗するには彼の神経はあまりにも引き裂かれていたのであるか。<sup>19)</sup>その無力感の故に、彼にとっては病気さえも自分の存在を確認するための現実的な手がかりとなる、といった心理的顛倒が起こっている。スターンは死を間近にした一七六八年三月、或る婦人に宛てて書く「I am *very ill*—Yet I feel *my Existence Strongly*」<sup>20)</sup>『イライザに寄せる日記』においては、病気は錯乱にまぎ進捗することによって、スターン自身は、死に近づき、崩壊に近づくが、その中で一瞬彼はイライザ——今や彼の半身ともいうべきイライザ——の存在を確かめることが出来、そうして始めて彼の心は平安を見つけ、和らぐように見える。『イライザに寄せる日記』の中では二、三種の薬物（スターンはその一つを飲んで死ぬ思いをする）が使われているが、スターンにとってイライザとは或る時は鎮痛剤である——‘Sooth me—calm me—pour thy healing Balm Eliza, into the sores of hearts—’ (July 11) また或る時は感情の嵐の中へ、彼を崩壊からつなぎ止めてくれる錨である——‘in this Storm of Passions, I have but one small anchor, Eliza! to keep this weak Vessel of mine from perishing.’ (June 4) そしてつらには「第二の自分」としての「親友」‘my second self’ (June 21) とやえ認識される。そしてスターン

はこうした様々なイメージを与えてくれる「わが心の女性」‘Woman of my heart’ (July 5) と共に、現実をのがれたひそやかな理想郷<sup>ユートピア</sup>の愛のドラマを演じてみたいと思つた。——‘ere every thing is ripe for our Drama—I shall work hard to fit out and decorate a little Theatre for us to act on—but not before a crowded house—no Eliza—it shall be as secluded as the elysian fields—retirement is the nurse of Love and kindness—and I will woo and caress thee in it:..’ (July 5) 或る日はイライザのための部屋‘romantic Apartments’を夢想し、部屋の備品に至るまで驚くほど細かな配慮を行っている (June 29)。<sup>21</sup> これらもスターンの妄想に他ならないが、彼はもはや理性のうごかすことをやめて、ひたすら感情に惑溺してしまつた見える。——‘and What is Wisdom to a foolish weak heart like mine!—Tis like the Song of Melody to a Broken Spirit.’ (June 9th)

しかし、やがてその惑溺を断念すべき時が近づいていた。

四

『イライザに寄せる日記』一編は、おおむね「われ愛す、故にわれあり」‘amo ergo sum’<sup>22</sup>といわば、惑溺の精神ぐといったものによって書き続けられている。恐らくはこの精神も、いわゆる「洗練され高められた感情」というスターンのセンチメンタリズムの中に入っていたに違いなく、時代もまたこれを悪徳とはしなかつたのだが、後世に伝わったセンチメンタリズムは「精神」の方を抜かした「惑溺」だけだったのである。この『イライザに寄せる日記』が問うている問題はしかし、結局、病苦と恋情<sup>エロス</sup>による二つの狂気とへ書くことへの相剋である。イライ

ザへの愛情と妻への不安と憎しみ、高熱を出しては不思議に恢復し、次にはまた悪化することをくり返している彼の肉体、不如意の現実、そして近づく死の予感……これらのトータルな現実が強いる感情の嵐と、それら負の価値をフィクションに転化させようとするスターンの「ヘペン」への相剋<sup>22</sup>である。しかしこの相剋は、現実処置すべき二つの事柄によって中断され、あるいはさらに引き継がれてゆくことになる。一つは妻と娘の帰郷と、財産整理の現実的手続きのためであり、今一つは『センチメンタル・ジャーニー』執筆専念のためである。彼は『イライザに寄せる日記』をあきらめる。ということとはイライザをあきらめる。八月四日、彼は「私のすべての苦しみを伝える一つの普遍的な話」『one general Account of all my sufferings』を『イライザに寄せる日記』ではなくもっと長い物語に——つまり『センチメンタル・ジャーニー』に——仕上げることを決意してイライザに別れを告げる(August 4)。

『イライザに寄せる日記』から『センチメンタル・ジャーニー』への移行は、より本格的な文学作品の創造への移行であり、『イライザに寄せる日記』の妄想から覚醒への移行であったといえよう。スターンの肉体は死に近づいていたが、彼の前にはまだ手にすべき「ヘペン」があった。

注

テキストは Ian Jack, ed., *A Sentimental Journey through France and Italy to which are added The Journal To Eliza and A Political Romance* (London: Oxford Univ. Press, 1968) を使用した。テキストからの引用は日付のみを括弧内に

示し、ページ数は示さなかつた。なお注の部分における引用は可能な限りこれを行なつた。

- (1) W. L. Cross, *The Life and Times of Laurence Sterne* (New York: Russell & Russell, 1967). p. 440 = 'As if designed for publication, the manuscript contains numerous blots and interlineations for better phrases, in addition to the introductory note, which was clearly framed to mystify the general reader ....'
- (2) *The Journal To Eliza* のトキストの冒頭が「これである。この中では Counter part があつたことが暗示されてゐるが、本文でも後に述べるように Eliza の方からの書簡は消失してゐる。なお、単語の綴りは原文のままである。
- (3) L. P. Curtis, *Letters of Laurence Sterne*, p. 319: <Letter 192> = '—Not Swift so loved his Stella, Scarron his Maintenon, or Waller his Sacharissa, as I will love, and sing thee, my wife elect! All those names, eminent as they were, shall give place to thine, Eliza.'
- (4) *Ibid.*, pp. 312-3: <Letter 189. To Mrs. Daniel Draper> (London, March 1767) = '—You are not handsome, Eliza, nor is yours a face that will please the tenth part of your beholders, —but are something more; for I scruple not to tell you, I never saw so intelligent, so animated, so good a countenance....'
- (5) *Ibid.*, p. 298: <Letter 180. To Mrs. Daniel Draper> (London, ? late January 1767)
- (6) *Ibid.*, p. 304: <Letter 185. To Mrs. Daniel Draper> (London, ? March 1767)
- (7) *Ibid.*, pp. 306-7, foot note <2> ⑥ 'キヤーハンが、1767年10月の夏知の如く、Richard Griffith (1714-88) の挿書を含む用参照。
- (8) *Ibid.*, pp. 301-2: <Letter 183. To Lydia Sterne> (Old Bond-street, February 23, 1767) = "his true I have a friendship for her (Mrs. Draper), but not to infatuation——I believe I have judgment enough to discern hers, and every

woman's faults.')

- (㉞) Cf. W. L. Cross, *op. cit.*, p. 434.
- (㉟) 出づる由せは四月十二日(田圃田)に於てある。是のJournalの由せは「田圃の由せ」に於て考へらる。其の由せは「  
な」本體の由せに於てキヌの日記の體になつた。 Cf. L. P. Curtis, *op. cit.*, p. 327, note 1.
- (㊱) Cf. L. P. Curtis, *ibid.*, p. 398. <P. S. to the Letter 217. To Mr. and Mrs. James> (Coxwould, October 3, 1767)
- (㊲) See *Journal* (July 4th) = '—She is coming, every one says, to flea poor Yorick or slay him—'. Cf. W. L. Cross, *op. cit.*, p. 456.
- (㊳) W. L. Cross, *ibid.*, p. 439.
- (㊴) *Ibid.* Cf. W. M. Thackeray, *The English Humourists and The Four Georges* (Fverymán's Library No. 610) 頁  
"Sterne and Goldsmith." (pp. 222-63)
- (㊵) L. P. Curtis, *op. cit.*, p. 320. <Letter 193. To Mrs. Daniel Draper> (London, ? 30 March, 1767)
- (㊶) David Thomson, *Wild Excursions: The Life and Fiction of Laurence Sterne* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1972), p. 263.
- (㊷) L. P. Curtis, *op. cit.*, pp. 360-1: <Letter 201. To the Countess\*\*\*\*\*/Mrs. Daniel Draper>, <—To the Countess of\*\*\*\*\*> (Coxwould, June 18) (218 June 1767)
- (㊸) *Ibid.*, p. 394: <Letter 213. To Sir? William Stanhope> (?Coxwould, September 19, 1767) Cf. *Tristram Shandy*, VI, 6: 'Ask my pen, —it governs me, —I govern not it.'
- (㊹) Walter Sichel, *Sterne: A Study* (New York: Haskell House, 1971), p. 279.



- (20) L. P. Curtis, *op. cit.*, p. 416 : <Letter 234. To Mrs. Montagu> (London, ? March 1768)
- (21) Ian Jack, *op. cit.*, 'Introduction to *The Journal To Eliza*, p. 133.
- (22) イライザとスターンの関係の危うさだつてのV・ウルフの観察は、作家の書く行為と現実とのあいだにある背理をつらじ興味深々。 Cf. Virginia Woolf, *Granite and Rainbow* (London : The Hogarth Press, 1958) : "Eliza and Sterne," pp. 176-80.

## 第十三章 スターンの道化

はじめに

一、『イライザに寄せる日記』—現実との懸隔感—心理的理由—創作心理的理由—存在論的理由—ヒューマー意識との関係—スターンにとっての肉体

二、『センチメンタル・ジャーニー』—喜劇的跳躍—Nature—調和—ハムレットの道化—さまざまな定義—ヨリックの死と再生—道化と死神

はじめに

ローレンス・スターンがその最晩年に書き綴っていた日記『イライザに寄せる日記』（一七六七年執筆、一九〇四年出版）によって、われわれはいわば老ヒューモリストのエロス（イライザ・ドレイパーへの感溺ぶり）とタナトス意識（肉体の死への接近による書くことの進化）および、プレ・ロマンティシズムのグロテスクのあり様を知る

のであるが、私がこのことを跡づけようとした時<sup>①</sup>、十分に展開できなかつた一つの論点がある。それは、スターンが「ヨリック」という喜劇的人物に仮託した意味あいといった問題である。このローレンス・スターンの道化は『トリストラム・シャンデイ』で始めて登場し、その後終生続いたスターンの中の或るイメージである。いま『イライザに寄せる日記』を再び取り上げるに当たつてこの問題を考える場合、この『日記』とほぼ並行して書かれて、しかも同じ「ヨリック」を主人公とする『センチメンタル・ジャーニー』をも当然考えに入れなくてはならないだろう。これら二つの晩年の作品（『イライザに寄せる日記』を一つの文学的作品と見なす理由については先の論考で述べた）を通して、スターンの中の「ヨリック」イメージはどのように捉え得るのであるか。以下はそれをめぐつての私の観察である。そしてこの際私は、スターンをほぼヨリック氏そのものとして捉えておこうと思う。あるいはヨリック氏を殆どスターン自身として考えるところでも同じことである。じつはこうした言い方の中にすでにスターン文学における作者と主人公のイメージとのあいまいな融合が予想されているのであつて、「物語の中のトリストラムと外側のスターンとの間のあの奇妙に魅力的な相互作用」<sup>②</sup>こそが彼の書き物の基本的性格であり、ブラッドベリのこの言葉の中の「トリストラム」を「ヨリック」に代えて考えてみても事情は変わらないであろうと思われる。まず『イライザに寄せる日記』を手がかりに、ヨリック像の性格を捉えてみよう。そこにどのような問題が出てくるか。

## 一

『イライザに寄せる日記』はおよそ『トリストラム・シャンディ』からは遠い、むしろロマン派の先ぶれとなるような、ヤング（その『夜想』は一七四二―五年）やグレイ（その『エレジー』は一七五一年）の、いわゆる「墓地派」を想わせるひたすらな〈感情感溺〉を示した日記である。これがじつは多分に私的な書き物であり、運命の偶然によって反古にされるところを救われ、今世紀初頭に至って始めてW・L・クロスが校訂、出版した事情については先の拙論で言及したところであり、ここでは述べない。さてこの日記の書き手をスターンは「ヨリック」としているのであるが、スターンの書簡集を編集したL・P・カーティスの本では『イライザに寄せる日記』は、他のスターンの手紙類にまじえて年代順に並べてあり、その中の一七六七年四月十三日から八月四日、及び十一月一日の追伸までは、特別に“*The Journal To Eliza*”という但し書がつけられている。これはヨリック⇨スターンの関係を具体的に示す例でもあって、スターンはイライザへの手紙を書くさいに単にヨリックの名を利用しただけと考えた故にカーティスはこれを書簡集の中に組入れたのであろう。しかし一方、スターンはこの日記を出版する意図があつて、読者という存在を意識して書いていることがクロスの観察によつて明らかにされているので、まるつきり私的な手紙という訳にもゆかない、というのがこの『イライザに寄せる日記』の二面的性格である。

ところで『センチメンタル・ジャーニー』の主人公も勿論のことヨリックで、この方はほぼ完全にフィクションの世界の人物であり、『イライザに寄せる日記』におけるスターン⇨ヨリックの関係ほど作者に近しくはないとは言

える。しかし果たして日記のヨリックと『センチメンタル・ジャーニー』のヨリックと、どちらがスターンに近い  
か、つまりどちらが本質的にスターンの的であるかというところは一概に決められない問題であろう。「日記」という形  
式は、あるいは作家が自己を韜晦するのに最も適した形式であるかも知れない。スターンのように自意識の鋭い作  
家がそれを利用しない筈はない。しかし一方、フィクションにおける方が真実を語りやすいということがある。「道  
化」の仮面をかぶって、〈旅の空のセンチメンタリズム〉をうそぶいている方が、いかにもヨリックというシェイク  
スピアの道化の名を冠したスターンにはふさわしいし、つまりそのペルソナの気楽さのうちに、彼はどこかで自己  
の本質をさらしているかも知れない。

さて『イライザに寄せる日記』におけるヨリックとスターンは、彼の最後の狂恋の相手ダニエル・ドレイパー夫  
人エリザベスに対する病的なまでの惑溺と、現代的な意味で言うセンチメンタリズム、つまり「感傷ぶり」を露呈  
している。スターンはその死の前年一七六七年一月ロンドンのあるサロンで、東インド会社の有能な社員の妻であ  
り、'belle Indian'と呼ばれていたイライザに会う。スターンの娘リディアよりわずか三つ年上であり、二人の子持  
ちである。当時の慣例で子供の教育は本国でやることになっていたこともあり、また暑いインドでの養育疲れをい  
やすという目的もあつて、イライザは一時帰国してロンドンに滞在していた訳である。このイライザという女性は  
たまたまスターンのいわゆる恋愛遊戯の最後の恋人だったので、文学史の中に例えばスウィフトにおけるステラに  
似て、一つの名をとどめる存在になつたにすぎないのであるが、丁度スターン夫人エリザベスと同名でもあり、夫  
人同様極立った美人ではないが、ある程度教養は積んで魅力的なところのある女性であつた。スターン夫人もかつ

ては明敏で趣味も豊かな女性であり、青鞥派閨秀作家エリザベス・モンタギユ（一七二〇—一八〇〇）とは従姉妹の關係にあるということなどもあつてか、結婚前は周囲に崇拜者を集めるくらい魅力はもっていた。こうしたことから、イライザとスターン夫人の、スターンにとつての類似性を想定できなくはない。イライザへの献身ぶり、スターン夫人になる前のエリザベスへの献身ぶりには似たところ（病床につきつきりて看病したりする）があり、あるいはこうしたことにスターンの一貫した女性観が読みとれるかも知れない。スターンのコンプレックスさえそこに感じ取れないことはない。何故なら、恋愛のパターンがほぼ同じであり、イライザ・ドレイパーに送った手紙がかつてのスターン夫人に送った手紙そっくりであつたりすることの中には、くり返し同じタイプに惹かれざるを得ないスターンの性向が感じられるからである。

イライザとスターンは父娘ほどの年の差も無視して四ヶ月ほどの間、熱烈な交際をし、殆ど手紙を欠かさずに出し合っている。ところが、そのように二人の關係が進行して行っていた折、突然イライザの夫からインドへ帰るよう催促の手紙が来る。スターンは彼女にロンドンにとどまるように何度も説得するが、結局夫の要求に屈してイライザはインドへ帰ることになる。スターンの失望、嘆きはこの時いうまでもなかったのであるが、こうした成行きの後には、インドへの経済進出及び政治的支配を図って行ったイギリス帝国主義の時代の影ともいふべきものを感じ取ることができる。もしイライザが東インド会社社員の妻でなかったとしたら、事情は変わっていた筈だからである。『イライザに寄せる日記』成立の背後にこうした時代の流れがあることは、『センチメンタル・ジャーニー』の背景に七年戦争があることと同じく、スターンの文学を考える場合の一つのヒントにはなるであろう。

とは言え、そうした時代的制約を彼らにどうすることも出来なかったことは勿論であり、娘のような恋人に情熱を傾けていた五十四歳の老作家にしてみれば、この事態はいわば運命であったと言つてもよい。だが、運命であるにしては、スターンとイライザが会つて別れるまでの七ヶ月間のプロセスは、それほど大した事件だったのだからかという感じがある。イライザとの関係に終止符を打つ八月四日の最後の日記に至るまでの表面の抒情的な嘆きの調子にいつわりはないとしても、全体として見ればやはり恋愛遊戯は恋愛遊戯、おあそび、といった感じがしないことはないのである。

つまり問題は、ヨリックⅡスターンがどこまでイライザとの恋愛関係において本気であったかということである。スターンの言葉の熱烈さにもかかわらず、あるいはそれ故に、彼らのあいだはあくまでプラトニックな恋愛関係にとどまっていたのではないかと思われるのである。そしてヨリックⅡスターンは、むしろイライザがいなくなる成行きを敢て甘受するところがあつたのではないか。それまでの女性関係におけるスターンのむら氣、かつて自分の妻になる女性に宛てた手紙の殆どそのままを、いままた、新しい恋人に宛てて書く神経、また、例えば『セブンメンタル・ジャーニー』(ハマライアの章)で、狂女マライアに対する同情のあまり、もし他ならぬイライザの思ひ出が自分の心の中から消えたら、今度はマライアを自分の娘のようにしてやりたい、などと書いて、いまこんなに熱中しているイライザもいずれば自分の記憶の中からうすれてゆくことを予想していることなどを考えてみれば、イライザとの関係に対するスターンの距離の置き方が想像できるのではないか。この距離はつまり現実とのへだたりということであり、こうした懸隔の意識はヨリックⅡスターンのイメージの根本につねに存在するものではある

まいか。

私見によれば、イライザとの関係において、その現実から距離を取ってそれを見ているというスターンの精神的位相に関しては、お互いに関連する三つの理由があるのではないかと思われる。それは、(1)心理的理由、(2)創作心理的理由、(3)存在論的理由のそれぞれである。

第一は、スターンが恋愛をもともと虚妄と見ていたのではないかということである。表面的に女性の心と遊びたわむれ、そこに出現する心理の揺曳の方が彼にとってリアリティのあるものである。現実のいきさつそのものよりも、それによって自分の内部がゆらぎ、おののき、そうして充実感を覚えるということがスターンにとって意味のあることであつた。スターンはたしかに好色な牧師であつたには違いないが、行為そのものが目的ではなく、それがもたらす感情sentiment自体が問題であつた。そしてこの時代のsentimentには、現代で使う受身の感覚ではなく、却つて「洗練され高められた感情」という積極的なニュアンスがあつたことは、スターン文学研究においては周知のことである。<sup>(5)</sup>さらにこのsentimentの主張は、当時の女性読者層の増大によって迎えられ、それ自体「理性」中心の古典主義的思考から「感情」中心にものごとを捉える時代の感性の方向を表わすものでもあつた。しかしながら、スターンには何故感情の揺曳が問題であつて直接相手の女性との新しい生活に入るといふようなことにならないのか。何故現実的な達成までゆかないのか。恋愛を虚妄と見る態度とは何か。ここで例えば精神分析的観点から、スターンを性的不能者として示唆する意見(A・デイ・フロウ)を持つて来てもよい。このことでスターンの無力感の現実的うらづけが可能になるであろうからである。しかし性的不能者という規定がスターンの文学の世



界でどれほどの意味があるのであろうか。デイ・フロウの主張はそれ自体がヒューマラスな印象を与えるもので、それ以上にゆくものであるか、疑問なしとしない。

スターンにとって恋愛が現実のすべてとして実現されることにならない第二の理由は、おそらくスターンがへ書くこと〴〵という言葉の行為によってしか現実をとらえ得なかったのではないかということにある。イライザとの経験を夢想し、それを日記に綴ることがつまり彼自身を生かしていたのだ。そのことのためにはイライザの不在はマインスの価値ではなかった。そしてイライザはたまたまイライザ・ドレイバーであったに過ぎず、彼としてつねに心の中にいわばドン・キホーテの思い姫ダルシネアのイメージを思いえがいておればよかったのだ。じつはそこに現実に対する深い無力感——『トリストラム・シャンデイ』の世界の人々が現実的には無力であるように——現実には無効な自己の存在感を抱いているスターンその人をわれわれは考えることが出来る。スターンにおけるへ書くこと〴〵は、インドに去ったイライザを中心に展開していることはいうまでもないが、それは要するに現実の空白を埋める言葉の行為に他ならず、先に述べたへ現実との懸隔感〴〵をバネとしてこの行為は成り立っていると言うことができる。スターンとしては『トリストラム・シャンデイ』の世界とちがって、『イライザに寄せる日記』においては、じつは語るべき、伝えるべき物語は何もないのだ。ここにいるのは物語作家でもなく、『権争物語』を書いたような伝奇作者でもなく、いわば語るべきものの何もない空間に向き合って自意識的に告白めいた言葉を書きつらねている病んだ老ヒューモリストに他ならない。だから語るべき物語が——ということとは『センチメンタル・ジャーニー』が——スターンの内部でその構想を得て次第に進行して行く過程の中でイライザのことは遠のいてゆき、

やがて八月四日の日記でイライザと訣別するのだ。

以上のような事情は第三の理由に関わるのであって、つまり存在論的に言えば、スターンには本質的な無力感 essential disability があつたのびななにか、とどういふことである。例えば、四月十五日の日記に次のような箇所がある。

“worn out with fevers of all kinds but most, by that fever of the heart with which I'm eternally wasting, and shall waste till I see Eliza again——dreadful suffering of 15 Months!——it may be more——... What a change, my dear Girl, hast thou made in me!——but the Truth is, thou hast only turned the tide of my passions a new way——they flow, Eliza to thee——and ebb from every other Object in this world——.”<sup>(9)</sup>

そしてまた翌々日の四月十七日の日記にはこうある。

“dined alone again to day ; and begin to feel a pleasure in this kind of resigned Misery arising from this Situation, of heart unsupported by aught——but its own tenderness——.”

つまりここには、イライザを想うことによつて始めて満たされる空虚な心とどういふものが描かれている。そして現

実から後退した隠遁のみじめな境遇——*resigned Misery*——の中にかえって楽しみを感ずる病的な心の動きも表わされている。この時ヨリック＝スターンの内部は虚妄であつて崩壊に瀕していると言える。かろうじてイライザのイメージが彼の内部に生命の流露感を与えている。本質的にはしかしここには、自己の存在が空白になつてゆくようなところを見ているスターンがいる。この存在の空白感ということは、スターンが自らのアイデンティティを捉え難く思っていたのではないかという仮説を可能にしてくれる。このようなオントロジカルな問題をとらえ、同時にロマンティズムとの類似性をとらえた言説が、デイヴィッド・トムソンの『ワイルド・エクスカージョンズ』にあることは、前章（第十二章、注16）で見たとおりであるが、多分に実存主義ふうのトムソンの解釈は今日においてもなお有効である。

そして『イライザに寄せる日記』に類出するところの、ヨリック＝スターンの、熱病によつて衰弱してゆく肉体の危機意識も、恐らくトムソンの言う‘essential disability’や‘insubstantial identity’の感覚を強める原因になつていたのであろうことは想像できる。

ところで、以上のようなスターンの懸隔意識の内容に対して、スターン本来のヒューマー意識、あるいはヨリック本来の道化意識はどのように関わっているのだろうか。

『イライザに寄せる日記』にヒューマーの要素は寡い。それは殆ど連綿たる哀訴の言葉に満ちている。その意味ではこれは直接的にわれわれの情感に訴えてくるものを持つ純粹な書き物である。だがヒューマー意識が現われないことはない。例えば四月二十四日の日記には、自分の病気を友人の医者から「梅毒」ではないかと指摘されて、妻

とは十五年間も同衾していないのだから、そんな筈はありません、とヒューマラスに反論するところがある。仮に「梅毒」云々が事実だったとすると、「性的不能者」スタンというデイ・フロウの仮説は有力になる訳であるが、しかしわれわれはスタンが、言葉通りにとれば深刻な事態になるところを、喜劇的感覚でもって表現している事実に注目したい。感情感濁のさなかにそうした喜劇的意識が入るということ自体、作者がいかにか感濁の状況から離れてそれを見ているかということを示すのに他ならないからである。従つてここには、自分の病気からさえ後退してそれを眺めている、つまり言葉の世界に韜晦しているスタンを見ることがができる。これは例えば、『トリストラム・シャンディ』第五巻の、トリストラムの兄ボビーの死の報告が入ったさい、奇妙きてれつな古今のことわざを父親ウォルター・シャンディが披瀝して、自分の息子の死の事実を言葉で追いやつてしまおうとする喜劇的試みの場面を想起すれば、そこに死と、それに対する言葉による韜晦の徹底的な喜劇的衝突を見出すことが出来るのと同様であろう。こうしたところにスタンのヒューマラーの本質的なあり方がうかがえるのではあるまいか。

ところでスタンにとつての肉体とは、スウィフトにとつてそれが憎悪と恐怖の対象であつたと思われるのと違つて、どれほど錯乱と感濁と嗜血に苦しめられようと、また老年と死が憎悪すべきものであろうと、それは同時に、調和と美とよろこびの座——the seat of harmony, beauty and pleasure<sup>7)</sup>であつたのであつて、亡ぶべき肉体の宿命を最終的にはスタンには受容していると言ふことができる。そして観念が根本的に無力とあるにしても、スタンには肯定すべき肉体があつたということが——積年の宿痾にもかかわらず——ヨリックⅡスタンの喜劇的意識を支えていたといえる。しかし現実には彼の肉体は、日記の最後の追伸（十一月一日付）を書き終えて

四ヶ月後の一七六八年三月十八日に亡びてしまう運命にあった。

『イライザに寄せる日記』には以上に見て来たようないくつかの問題点が見られる訳であるが、スターンはこれを書いてゆくうちに、先述したように、やがて新たな創作『センチメンタル・ジャーニー』執筆に専念してゆく。これは一つには、南仏モンペリエに保養のために移り住んでいたスターンの妻がスターンとイライザのうわさを伝え聞いて、財産整理を要求するため娘リディアと一緒に帰国するということになり、イライザへの日記を書いてばかりもいらなくなつたこともあるが、もう一つには、これも先述したように、イライザのイメージ自体が、スターンの中で『センチメンタル・ジャーニー』の中の単に一つの点景となり変わってしまったことにもよると思われるのである。スターンには、日記がイライザに対する思慕の情の過剰なくり返し（例えば七月二十七日の日記など）となるに及んで、それを書き続けることの限界——つまりはそれ以上に書くべきことがないという思い——が明らかになってきたのではあるまいか。この書き物のモチーフが現実の恋愛事件であった以上、いずれはスターンのことであれば、熱もさめるだろうことは、彼自身も予想していたことではなかつたであろうか。先に見たようにスターンにとつて問題は彼自身にあった。自己の現実存在ということにあった。そのことを、それでは、『センチメンタル・ジャーニー』に見てみるとどうであろうか。

## 二一

『センチメンタル・ジャーニー』は英国とフランスが七年戦争（一七五六—一七六三）をやっているさなかに、スター

ンが一七六二年大陸に渡った経験をもとにして書かれているが、そうした時代背景や周囲の風景描写は殆ど一貫してはぶかれ、ただ主人公ヨリックと様々な女性、他教団の托鉢僧、鳥や死んだロバ等との交感を中心に進められる。原題は *A Sentimental Journey Through France & Italy* とあるのに、出てくるのはフランスでの話だけで、イタリアのことはなにも出てこない。それは実際の経験を書いたというより、フィクション化したエピソードの連続というべきである。そしてここに取り上げられた人や事物はすべて、ヨリックの sentimentalization の対象である。「センチメンタル・トラベラー」と自らを規定したヨリックの旅は、心が高まるような「センチメンタル」な同胞愛、あるいは微妙な恋愛感情、さらには多分に病的な「観淫者の感性」voyeuristic sensibility<sup>(8)</sup>を刺激するような、セクシャルな部分まで含めた、「感情」中心の旅であり、『センチメンタル・ジャーニー』は形式的にも、通常の当時流行した旅行記の型を破った「旅行記のパロディ」ともいえるべき未完の小説である。

ヨリックは冒頭で、或る紳士と話をしている。「そんなことならフランスの方がずっとうまくやっていますよ」と言う。「そんなこと」*this matter*、というのが何のことか読者には知らせないままだ。すると相手は、「あなたはフランスへ行ったことがありますか？」と揶揄したので、それなら実地に見聞してきてやろうということで、早速（大陸旅行をするには簡単な）用意をし、ドーヴァー行の駅馬車に乗り、翌日はもうカレーの街に着いている、といったふうに、唐突な、人を食ったようなはじまり方をする。これはすでに『トリストラム・シャンディ』が、主人公トリストラムの誕生以前の、シャンディ夫婦がトリストラムを「仕込む」(Peggy's) condition のこっけいな場面からはじまるのと同様の、二つは *surprise beginning* である。このような描写は少くとも自然主義リアリズムで

はない。そこには喜劇的跳躍とでもいうべき、喜劇意識による描写対象の選択というものがある。『センチメンタル・ジャーニー』が短いエピソードをつないでゆく方法を取っており、自ずとそこにスタン特有の脱線的な雰囲気が可能になっているということ、この喜劇的跳躍ということとは、内容と形式の関係にそれらがあることを意味している。そしてまた、この喜劇的跳躍ということが、『イライザに寄せる日記』で少しく見たように、スターンの恋愛遊戯の基本的スタイルでもあったし、ヨリックが旅の中で次々に出会う人物・事物に心移しては、そこに同胞愛 fellow feeling の余韻を残して過ぎてゆくそのスタイルでもあった。つまりそれはヨリックの〈方法〉であったと言ひ得よう。

ところでヨリックは“The Passport, Versailles”の章で、或る貴族に次のように自分の旅の意図について説明する。

—’tis a quiet journey of the heart in pursuit of NATURE, and those affections which rise out of her, which make us love each other—and the world, better than we do.

つまり「自然を求めての心静かな旅」が、自分が旅をする目的だというのである。また、一七六七年十一月十二日の或る貴族への手紙でも（‘To Mr. and Mrs. James’）次のように書いている。即ち、

I told you my design in it was to teach us to love the world and our fellow creatures better than we do — so it runs *most* upon those gentler passions and affections, which aid so much to it.

ヨリックはこれら二つの言葉の中で「Nature」ということを言っている。それは簡単に言うると、世の中に対して「愛情」を湧き出させる源泉のことである。終章に近い「The Bourbonnois」の章では、「Heaven—eternal fountain of our feelings」と見なし、自分を越えたもの（「beyond myself」）をそこに見出し、すべてはこの「偉大な世界の中心」から来るのだと嘆賞している。恐らくこのNatureは、『イライザに寄せる日記』に見られるヨリックの激情の源泉ともなるものだったのであろうが、一方イライザをあきらめた後の最後の抛り所のようなものであったのかも知れない。最後の創作の中でこのような博愛主義的な思想の表現に至ったスターンの中に、われわれは、或る調和の感覚を抱くことが出来る、と言い得よう。

しかしこれが本当にスターン文学の結論だったとわれわれに断定させないものが、あらゆる規定の言葉の背後からのぞいている、というのが、じつはスターンのスターンたる所以であって、スターンという人がおいそれと「博愛主義者」といったレッテルで納まるような作家でないことは、『トリストラム・シャンデイ』におけるセンチメンタリズムの二重の意味、つまり歴史的な意味のセンチメンタリズムと、軽蔑的な、而も笑いを意図されたセンチメンタリズムの二つの表われを見てみるだけでも分かる。それ故ヨリックを、「自然」を最終の価値とする博愛主義者——宗教人としての要素を加味すれば、仁愛主義者ピネツオリストまたは自由ラティテニューディナリアン主義者——として規定するのでは、『イライ



ザに嗜せる日記』を見た、スターンの虚妄の自我‘insubstantial identity’（ナイヴァーシタ・ナム・イン）の問題を看過し、すことになる。ヨリックのイメージのもつ根本的な存在論的意味の問題はどうなるのか。これに対する答として、『パンチメンタル・ジャーナル』の“The Passport, Versailles”の章の次の箇所を挙げるのが出来る。ヨリックが自己自身に対して捉えがたく思っていることを、例によってジョーマーをこめて、表明しているところである。

THERE is not a more perplexing affair in life to me, than to set about telling any one who I am—for there is scarce any body I cannot give a better account of than of myself ; and I have often wish'd I could do it in a single word—and have an end of it. It was the only time and occasion in my life, I could accomplish this to any purpose—for Shakespear lying upon the table, and recollecting I was in his books, I took up Hamlet, and turning immediately to the grave-diggers scene in the fifth act, I lay'd my finger upon YORICK, and advancing the book to the Count, with my finger all the way over the name—*Me Yoici !* said I.

スターンはここで、「自己アルター・エゴの分身」としてのヨリックの、もともとのハムレット先王の道化を持ち出して、説明しがたい自分を韜晦させている訳である。もちろんここには喜劇化の意図があるであろう。しかし、にもかかわらず、ここには大事なテーマがある。そのことに入るまえに、これまでなされて来たヨリックの性格規定をいくつか見て

おこう。

まず『ローレンス・スターンの喜劇的技巧』（一九六七年）の著者ジョン・ステッドモンドは、ヨリックを「自意識的喜劇的人物（しかし道化ではない）」と見、トリストラムを「賢い道化」*wise fool*として、ウォルターやトウビーといった人物とともに「愚者」*dunces*の中に入れて<sup>(9)</sup>いる。W・B・パイパーはヨリックに「感情」というものの本質とその恩恵というものを教える「経験主義の教師」としての機能を与えて<sup>(10)</sup>いる。またW・L・クロスはヨリックを、「スターンのより理想的な自我」と考え<sup>(11)</sup>、アンリ・フリュシエールは「仮面<sup>マスク</sup>」としてのヨリックをとらえ<sup>(12)</sup>、B・H・レーマンは「想像力の絶対的道化」というように笑いの機能の体現者としてのヨリックを考えて<sup>(13)</sup>いる。そして以上に私見を加えれば、ヨリックという名は、他ならぬスターンの故郷Yorkのアナグラムではないか。O. E. D. によれば“Yorkshire”の定義の(2)にこうある。

= 2. in reference to the boorishness, cunning, sharpness, or trickery attributed to Yorkshire people. cf.

‘Yorkshiredom’= the character of a Yorkshireman.

つまり、「狡猾」*cunning*と「策略」*trickery*というのはエューモリスト・スターンには似つかわしいイメージであるし、地方性との結びつきについても、例えばハーバート・リードの『スターン論<sup>(14)</sup>』や“*Tristram Shandy* is an epic of Yorkshire life, and this fact is only an illustration of the profound truth that all the great epics of

the world are local epics.”という言葉があることを考えてみれば、ヨークシャーの風土性の影響といったものをスターンの中に想像することはあながち無理なことではあるまい。

ところで、いったいスターンはこのヨリックのイメージをどうして得たか。ここで先ほどのシェイクスピアの道化のところへもどってみよう。

ヨリックが「ここにゐる私がそれですよ!」*‘Me Voiç!’*と指を差した箇所は『ハムレット』の「墓掘人の場」(第五幕第一場、一九八―二二二行)であることは言うまでもない。そしてこの場面に見られる大きなテーマとは「時間」と「死」ということである。ハムレット王子がかつて自分を愛育してくれた宮廷の道化師ヨリックの髑髏を手にして、人生無常の感想を述べるこの場面は、道化の笑いが時間と死神の破壊力の前に空しく消え去っている、その絶対の宿命を述べる件りである訳である。ここにはつまりトムソンの言う*‘essential disability’*の窮極の姿がある。彼の言う虚妄の自我も消え果てるその運命が述べられている。スターンがその文学の中にヨリックを登場させた背後の原イメージがこの場面であり、シェイクスピアとの親近性というようなことより何より、スターン自身の生と死のテーマがここに集約的に表われているのだ。スターンは「死んだ道化」(この言葉使い自体が矛盾したレトリックではないか)ヨリックの中にならばヒューモリストとしての自己の生の象徴的イメージを得ていたのではあるまいか。スターンが無益にこのヨリックのイメージに先祖返りした訳ではないことについて、ジョン・トロウゴットは次のように言っている。

Not for nothing did Sterne trace his ancestry to Yorick. The Yorkshire parson, Sterne, like Hamlet, certainly imagined that the world's absolute meanings were to be found only in Yorick's empty eyes. But in some miraculous way Sterne finds such a reality a reassuring joke.<sup>(12)</sup>

ヨリックの「うつろな眼球」についてこれ以上の説明は加えられてはいないが、その空虚を見る眼がスターン自身のものであることは確かだ。そしてそれが何故、「励みになるような冗談」を見出す眼球になり変わり得るのか。ここに言われる「或る奇跡的な方法」とは、恐らくこういう言い方でしか表現できないものであろうが、これを例えば先に述べた「喜劇的跳躍」の方法ということで理解してもいいのではあるまいか。だがともあれその「跳躍」のプロセスにおいて、負が正に変わり、悲劇が喜劇に変わり、否定が肯定に変わる契機が隠されていること（しかもその契機のメカニズムを説明することは殆ど不可能だ）は確かである。そしてわれわれは、スターンの「励みになるような冗談」によって、たしかになぐさめを得るのであって、このことによってもスターンがヨリックを持ち来った意味を理解することが出来るよう。

ところで『トリストラム・シャンデイ』第一巻では、ドン・キホーテのイメージを与えられたヨリック牧師は敵どもと戦ったすえ、憔悴のうちに死んでしまう。ところが死んだ筈のヨリックが、物語の後になって再びよみがえり、再生し現れて来る。そして、『トリストラム・シャンデイ』を越えて、その後もスターンの中で生きつづけ、晩年の『イライザに寄せる日記』、及び最晩年の『センチメンタル・ジャーニー』の中に主人公となって現れるのは、

語り手トリストラムではなくて、他ならぬヨリックであるという事実の中にスタン文学の中で占めるヨリックのイメージの重要さを見ることが出来る。

そして私見によれば、結局ヨリックとは、先述のさまざまな定義のうちのステッドモンドやフリュシエルやレーマンの捉え方に近い性格であり、さらに同時に、死神に拉致され終わったハムレットの道化のニュアンスを色濃く持った道化的人物ということになる。そしてこの道化的人物は、〈wise fool〉でもなく、〈bitter fool〉でもなく、ただ〈benevolent but just exhausted fool〉であるということになる。スタンはつねに、「消耗」していたように私には思われる。

さて一九七三年に邦訳の出たミハイル・バフチンの『フランソワ・ラブレリーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』の中に、スタンとホフマンに関して、「これらの（スタンとホフマンの）作品は、いわばこれらの作品の中に表現されている主観的・哲学的世界観よりも力強く、深く、そしてよろこびに満ちている」<sup>(16)</sup>（傍点筆者）という言葉がある。この効果は、恐らく、〈死神〉と〈道化〉の出会ったヨリック像の中に、スタンが絶対の窮極の意味を見出していたことと無縁ではないであろう。そしてわれわれとしては、スタンが幾多の現実的な無力感をかさねながらも、作品の効果として達成した、このへよろこびに満ちている」というトータリティにこそ、スタン文学の最終的な抛り所を得たいと思うのである。

注

- (1) 前章「懸想と死神——晩年の恋愛遊戯」参照。
- (2) Malcolm Bradbury, *Possibilities: Essays on the State of the Novel* (London: Oxford Univ. Press, 1973), p. 36.
- (3) W. L. Cross, *The Life and Times of Laurence Sterne* (New York: Russell & Russell, 1967), p. 440.
- (4) A. De Froe, *Laurence Sterne and his Novels in the Light of Modern Psychology* (Groningen: P. Noordhoff, 1925), pp. 32-5.
- (5) 'sentiments' = 'properly signifies the feelings excited in our minds by means of the senses.' 1111 | 辞源 Encyclopaedia Britannica 1111 1111 1111 1111 1111
- (6) *The Journal To Eliza*, ed. I. Jack (The World's Classics), p. 136. 2111 A Sentimental Journey 2111 2111 2111 2111 2111 2111
- (7) Henri Fluchère, *Laurence Sterne: From Tristram To Yorick*, (London: Oxford Univ. Press, 1965), p. 208.
- (8) David Thomson, *Wild Excursions* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1972), p. 272.
- (9) John M. Steadmond, *The Comic Art of Laurence Sterne* (Toronto: Univ. of Toronto Press, 1967), Ch. V "Tristram as Clown," pp. 66-131.
- (10) W. B. Piper, *Laurence Sterne* (New York: Twayne, 1965), pp. 93-112.
- (11) W. L. Cross, *op. cit.*, p. 2.
- (12) Henri Fluchère, *op. cit.*, p. 347.
- (13) Benjamin H. Lehman, "Of Time, Personality, and the Author," *Laurence Sterne: A Collection of Critical Essays*, ed. J. Traugott (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1968), p. 24.

- (14) Herbert Read, "Sterne," *Collected Essays in Literary Criticism* (London: Faber & Faber, mcmlix), p. 248.
- (15) A. H. Cash & J. M. Stedmond, eds., *The Winged Skull* (London: Methuen, 1971) 版次' 註釋卷 "Seminars on Sternian Realities" 中の條註 (p. 76)°
- (16) 川端香男里訳(せりか書房、一九七三年) 四六頁。